

氏名	楊 世瑾		
学位	博士（日本語文化学）		
学位記番号	甲第166号		
学位授与年月日	2020年9月15日		
審査研究科	外国語学研究科		
論文題目	『訓蒙図彙』版本の研究		
論文審査委員	(主査) 大東文化大学教授	藏中	しのぶ
	(副査) 大東文化大学教授	田口	悦男
	(副査) 大東文化大学特任教授	佐竹	保子
	(副査) 国文学研究資料館・総合研究大学院大学准教授	相田	満

博士論文 審査報告

1. 本人の履歴、研究の経緯、および学術業績

この部分に掲載されている内容については、論文の内容の要旨及び論文審査の結果の要旨に関する箇所では無い為、加工がされておりますので、ご了承願います。

この部分に掲載されている内容については、論文の内容の要旨及び論文審査の結果の要旨に関する箇所では無い為、加工がされておりますので、ご了承願います。

2. 論文の要旨およびその特色

本論文は、中村惕斎（寛永六 1629 ～元禄十五 1702）原撰になる、日本最初の絵入り百科事典『訓蒙図彙』の現存版本四種、①寛文六年（1666）刊初版『訓蒙図彙』二〇巻、②寛文八年（1668）刊『増補訓蒙図彙』二〇巻、③元禄八年（1695）刊『頭書増補訓蒙図彙』二一巻、④寛政元年（1789）刊『頭書増補訓蒙図彙大成』二一巻を対象とした初めての総合的な書誌研究・本文研究であり、主たる典拠『三才図会』『本草綱目』の本文・図像の出典考証に基づき、増補部分に表出した出典引用・項目述作の具体的手法を丹念に考証した出典研究、また、情報学でいうオントロジの概念を援用して、類書・幼学書としての部立の構成・項目の分類・配列の方法のもつ分類体系の構造を分析した研究である。版種の異なる『訓蒙図彙』版本三種の内容・体裁、出典『三才図会』『本草綱目』の引用手法を緻密に考証し、『訓蒙図彙』を近世という時代の要請に応えつつ増補を加え、見出し語に童蒙書『千字文』の意匠を採り入れ、「四字句」形式を採るという工夫によって、日本独自の展開を遂げた近世絵入り百科事典の成立と位置づけた。

本論文の構成は次のとおりである。

序章では、本研究の対象『訓蒙図彙』の概略を述べ、『訓蒙図彙』に関する従来の研究史を概観し、現存する『訓蒙図彙』版本四種を網羅的に扱う本研究の意義を述べた。

第一節 問題の所在と本研究の意義

一、中村惕斎原撰『訓蒙図彙』版本四種／二、研究史／三、問題の所在と本研究の意義

第二節 本研究の方法と構成 一、研究の方法／二、本論文の構成

第一章『訓蒙図彙』版本の書誌は、書誌・出版状況の調査に基づく次の三節から成る。

第一節 寛文六年初版本の書誌 一、中村惕斎「叙」攷／二、中村惕斎「凡例」攷

第二節 寛文八年版本の書誌 第三節 元禄八年版本の書誌

第四節 寛政元年版本の書誌 一、寛政版本梗概／二、越前力丸光撰「増補訓蒙図彙序」攷／三、謙翁撰「三才千字文序」攷／四、春莊 端隆撰「跋」攷

版本四種の書誌を調査し、①初版本の中村惕斎「叙」「凡例」から、編纂意図が『蒙求』『千字文』に倣って名義・事物を対応させた童蒙書であり、当初は長男清平（八歳）のための私家版であったこと、ただし、惕斎自ら述べるように、①初版本の分類・構成には未だ改善の余地を残していたことを論じた。

第二章『『訓蒙図彙』版本の変遷』は、次の二節から成る。

第一節 初版本から元禄版本へ—大衆化の位相をめぐる—

一、元禄版本の文体・書体・本文形式／二、元禄版本の項目の増補改訂／三、項目の細分化／四、項目の統合

第二節 元禄版本から寛政版本へ—初版本への回帰—

一、寛政版本の項目の増補改訂／二、元禄版本の項目の統合／三、元禄版本の増補項目の削除

第一節では、③元禄版本の増補改訂の特徴として、①行草書体の漢字平仮名交じり文の頭書を付すこと、②朱子学者たる惕斎が①初版本では採らなかつた仏教の祖師・民間信仰の守護神、想像上の動物を増補し、③版面を縮小して出版経費を節減するために項目を細分化した点を指摘し、③元禄版本の細分化の背後には、庶民の歓心を買おうとする商業的な大衆化の意図があることを論じた。

第二節では、④寛政版本の増補改訂の特徴として、①③元禄版本が行った項目の細分化による重複項目を削除統合し、②想像上の動物を削除し、③版面を集合図に刷新した点を指摘し、④寛政版本「序」「跋」が、①初版本を賞賛する一方で、③元禄版本には一切言及しないことから、④寛政版本には、③元禄版本による増補改訂を修復して、①初版本に回帰しようとする傾向が認められることを論じた。

第三章『『三才図会』と『訓蒙図彙』初版本との比較研究』は、①初版本にみられる明代類書、明・万曆三五年（1607）王圻撰『三才図会』106 巻の部立・分類と図像の影響を考証した、次の五節から成る。

第一節 『三才図会』から『訓蒙図彙』初版本へ

第二節 『三才図会』「儀制」部の図像の影響

一、『三才図会』の図像の影響／二、『三才図会』「儀制」部の図像と『訓蒙図彙』初版本

第三節 『訓蒙図彙』初版本の下位分類とその図像化

一、百科事典の分類に注目する意義／二、『訓蒙図彙』初版本の下位分類の図像化／三、『三才図会』の図像の統合／四、『三才図会』の図像の採用と一項目内の同類の事物の増加

第四節 『三才図会』の図像の細分化

第五節 『三才図会』の図像の構図の改変 一、向きの改変／二、構図の改変

第一節では、①初版本の 540 項目、総項目数の 36 %が『三才図会』に一致し、最多の引用は「器用」部であること示した。第二節では、①初版本全 1484 図から、『三才図会』の図像 6125 図に類似する「儀制」部の図像 32 項目を抽出し、第三～五節で、その引用手法①～⑤を五分類して示した。第三節では、①初版本の項目に「下位分類」が内在し、しかも図像化されたために、①『三才図会』の図像を統合する 5 項目、②同じ図像を踏襲して同類の図像を増補する 9 項目が生じ、第四節では、①初版本の掲出語が一字または二字に限定されるという規則性が、③『三才図会』の図像を細分化する 7 項目を生んだことを論じた。第五節では、①初版本が版面の視覚的効果を重視し、見開きの図像を左右対称に配したために④『三才図会』の図像の向きを変えた 12 項目が生じ、①初版本が図像の枠の形を優先したために⑤『三才図会』の構図を改変した 6 項目が生じたことを論じ、①初版本の①～⑤の『三才図会』の引用手法を示した。

第四章『本草綱目』と『訓蒙図彙』初版本との比較研究は、明代の本草書、明・万暦 24 年 (1598) 李時珍撰『本草綱目』52 巻の出典考証である。①初版本が『本草綱目』の異名・本文と図像を忠実に継承し、「凡例」の「諸家の本草の図説」とは主に『本草綱目』であることを考証した、次の六節から成る。

第一節 『本草綱目』と『訓蒙図彙』初版本の項目

一、『本草綱目』の伝来とその和刻本／二、『本草綱目』と『訓蒙図彙』初版本の項目

第二節 『本草綱目』と『訓蒙図彙』初版本の図像

一、『訓蒙図彙』初版本「凡例」における図像／二、『本草綱目』和刻本の図像の二系統／三、『訓蒙図彙』初版本が参看した『本草綱目』版本の系統

第三節 『本草綱目』の図像の引用手法

一、『本草綱目』の図像の採用と一項目内の同類の事物の増加／二、『本草綱目』の図像の構図の改変

(一) 向きの改変 (二) 構図の改変

第四節 『本草綱目』異名・梵名・本文の引用

一、『本草綱目』の異名・梵名の引用／二、『本草綱目』の本文の引用

第五節 『本草綱目』李時珍の考証の引用

第六節 『本草綱目』の本文の図像化—「狒狒」をめぐって—

第一節では、①初版本 499 項目 (総項目数の 34 %)が『本草綱目』に一致し、特に動植物の部、巻七「宝貨」・巻十二「畜獸」～巻二十「花草」に引用が集中するとし、第二節では、このうち 19 項目の図像を『本草綱目』和刻本三種と比較し、①初版本が『本草綱目』承応・万治系統版本の図像を踏襲することをあきらかにした。第三節では、①初版本 1484 項目の図像のうち、『本草綱目』を出典とする 33 項目を分析し、三種の引用手法①図像の部分的採用と同種の図像の増補 (2 項目)、②向き (8 項目)・③構図 (4

項目)の改変を示した。第四節では、『本草綱目』の名義の引用について、①初版本が①異名を積極的に引用し、②梵名は一部引用し、③同文が他の類書にある場合も『本草綱目』を優先し、第五節では、『本草綱目』の李時珍の考証を尊重して厳密に引用することを考証した。第六節では、①初版本「狒狒」の画像が、『本草綱目』和刻本B系統本文「狒狒」の記述以上に、忠実に画像化していることを考証した。

第五章『訓蒙図彙』初版本の版面構成は①初版本の成立を論じて、「属対(対語)」の形式が版面上に「上下一対二組」として表現され、「四字句」群が内在することを論証した、次の二節からなる。

第一節 『訓蒙図彙』初版本における「属対」—上下一対の構成—

- 一、掲出語の「属対」 (一) 一字一致 (二) 部首一致
- 二、本文・画像の「属対」 (一) 一字一致 (二) 部首一致
- 三、『訓蒙図彙』初版本の「属対」の意義

第二節 『訓蒙図彙』初版本における四字句の構成

- 一、四字句の対応群／二、成獣・幼獣の対応群／三、部首対応群

第一節では、①初版本の二字掲出語の二字一対 314 対のうち、一字一致 66 例、部首一致 31 例を精査し、①初版本の「属対」の形式が、版面の「上下一対二組」の①掲出語のみならず、②本文の構成、③画像にも及び、三者が緊密に対応することを論じた。第二節では、①初版本の掲出語「四字句」群を二分類し、①一字掲出語を四語並べる項目は、版面見開きに四項目を配し、②二字掲出語を二語並べる項目は、二項目を対照的に配し、この掲出語・本文・画像の連繋によって、①初版本の「対語形式」「上下一対二組」の版面構成が成立したことをあきらかにした。

終章「幼学書から江戸の絵入り百科事典へ」は、『千字文』『蒙求』の影響を論じた、次の三節から成る。

第一節 「附」項目

第二節 『千字文』『蒙求』と『訓蒙図彙』初版本

第三節 『訓蒙図彙』の刊行の意義

第一節では「附」項目 484 項目が「叙」の掲出語に含まれないことを論じ、第二節では④寛政版本「三才千字文序」「凡例」と巻末広告『三才千字文』が①初版本の目次を収録し、幼童の素読・手習書として刊行された可能性を論じた。第三節では本研究を総括し、①初版本の「属対」「四字句」群の掲出語・本文・画像が三位一体で対応する「上下一対二組」の版面構成は、『千字文』『蒙求』の対語形式に倣って、中村惕齋が独自に工夫を加えたものであり、絵入り版本黎明期に属する『訓蒙図彙』①初版本を、素読・漢字手習いのための幼学書と博物学の類書の性格を兼ね備えた日本最初の絵入り百科事典と位置づけた。

巻末に、論拠となる史料を整理した附表一～五を掲載する。

附表一、現存『訓蒙図彙』版本書目集覧

附表二、『三才図会』と『訓蒙図彙』寛文六年初版本の項目対照一覧

附表三、『本草綱目』と『訓蒙図彙』寛文六年初版本の項目対照一覧

附表四、『本草綱目』「獸」類と『訓蒙図彙』卷十二「畜獸」の本文対照

附表五、『訓蒙図彙』寛文六年初版本の四字句群

3. 論文の審査内容および評価

第一に、主たる出典『三才図会』『本草綱目』受容の全体像から引用の手法を解明し、『訓蒙図彙』①初版本の版面構成の奥に内在する「上下一対」「四字句」群という構成を提示しえたことは、大きな発見であり、功績である。書誌および項目・本文・図像・版面構成の増補改訂の具体相を、知識・情報の大衆化につれて増補されてゆくプロセスの細部にわたる緻密な考証によって解明し、優れた成果を示した。

第二に、『訓蒙図彙』版本の増補改訂の版行史は、当初、私家版の①初版本が評判を呼び、③元禄版本が原撰者・中村惕斎の関与のないまま、商業的な増補改訂を施して無許可で版行され（京・本屋仲間記録『済帳標目』）、惕斎没後、①初版本の版木が摩滅した頃、④寛政版本が③元禄版本には一切触れず、①初版本に回帰しつつも、挿絵を集合図に改訂して増補改訂版を版行した、と要約される。重要な発見であり、細部の考証に終止せず、大局的な視座から『訓蒙図彙』版行史の意義と重要性を明記すべきである。

第三に、出典『三才図会』の影響が、従来の説ほど顕著ではないという指摘は重要である。ただし、書名を継承する『三才図会』の影響は看過しえない面がある（第三章）。なお検討を続けられたい。

第四に、出典『本草綱目』は、明代の本草学から博物学への展開を示す本草書である。その甚大な影響下に成立した『訓蒙図彙』は、博物学の日本での発展を示す博物書でもあり、本研究は大きな可能性を秘めている（第四章）。『訓蒙図彙』と中国の類書の部立・分類体系のちがいは、もっと強調されてよい。

第五に、『蒙求』『千字文』に倣い、名義と事物・図像を対応させた本書の享受論として、『訓蒙図彙』の名を冠する30種におよぶ諸分野の追隨作や『訓蒙図彙集成』、『重宝記』『節用集』等（第二章）を生かした研究の深化が期待される。1000項目の「附」項目も、『千字文』を踏襲するものであろう（終章）。

申請者は、卓抜した日本語能力で、忍耐強く几帳面な資質とバイタリティで黙々と地道な研究に取り組み、『訓蒙図彙』の版行史の全貌を初めてあきらかにした。今後は、『三才図会』『本草綱目』、『蒙求』『千字文』のみならず、多様な引用書を詳細に検討するとともに、『訓蒙図彙』の出典体系を軸として、これを支える近世ネットワークと類書・古辞書、幼学書、博物学の具体相を解明していくことを期待する。

4. 結論

以上の審査内容、評価に基づき、本論文を審査対象とする学位論文審査委員会は、全員一致をもって、本論文は博士（日本語文化学）の学位を授与するに値するものと判断し、ここに報告する。

以 上